
人鬼

夢野欠片

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人鬼

【Zコード】

Z9350D

【作者名】

夢野久片

【あらすじ】

この話はとある少年の贖罪の話。満月が昇る夜。彼と彼女は再会する。

序章

とある夜のこと。

月は綺麗な満月。

日頃誰一人として近づかない裏路地。

ハウ、アあ。

すでに存在しないはずのソレの呼吸は乱れ、意識は断裂している。されど呼吸が乱れるのは疲労からではない。

ソレはただ単純に恐怖していた。

自分を追いかける狩猟者に。

ソレは見かけはただの少女だった。

汚れがひとつもない白いワンピース、透き通るように白く細い腕。ただ、その右のわき腹がごつそりと抉られていなければの話だが。少女はズルズルと這うようにして移動している。

焼け爛れた声。

アアア、イヤダ。ハウ、シニタクナイジニタクナイ

アア、ハ・・・。

少女は何かに憑りつかれるように逃げていく。

と。三つ目の角、ソレは突然這うのを止める。

アア。アアアアアアア。

少女は目の前にある状況に絶望する。

目の前には少女を狩る者がいる。

少女を狩るものは少年だった。

小柄な背丈にくしゃりとした髪。

学生なのだろう、校章がついたブレザーを着ている。

ごくありふれた日常で見かける少年はどこか異質。

その理由は右手に持った抜き放たれた日本刀か。

月の光を反射する日本刀は武器であることを忘れさせるほど美しかった。

それともこの状況をじつとカメラみたいな無機質な目でソレを見据える少年自身か。

ソレは独白を始める。

ナンテ・・・。

ワタシが死ナナイとイケナイノ?

ワタシノ病氣ハ簡単一治るツテお医者サマはイツテタノニ。
ダガラ、ワダジハ生キレル。ダカラオネガイワタシハジニタクナイ。

支離滅裂な言葉。

それでも少女の言葉は言葉にならなくとも人の口を動かす、間違いなく悲痛な叫びだった。

だが、

どぶん。

水に大きな石でも投げ入れたような音。

瞬間、少女の叫び声。

アアアアアアアアアアアアアアアアアアイダイイダイイダイイ
ダイイダイイダイイダイ、コンナノヤダ、ジンジャウダズゲデ
見れば少女の肩に日本刀が深々と突き刺さっていた。

ヤメテ、ヤメテ。ヤメテ、イダイイダイイダイ、ハヤグヌイ
テエ

されど少年の表情は変らない。

そればかりか突き刺した日本刀をゆっくりと回転させる。

ア、ア、アア、ア、アアアアアヒイ。

ゆっくりと日本刀を抜きもせずに少年は少女の首へと近づけていく。
まるでそれはステーキを真つ二つに裂くかのようだ。

そして

アアアアアアアアアアアアアア。

少女の絶叫が路地に反響する。

「終わつたようだな。白川 真。」

少年—白川 真は声のするほうを向く。

路地に響く暗い声。

路地には男が立っていた。

2 近い長身。黒く蝙蝠の翼めいたコート。

月の色をそのまま髪に写したような銀の髪。

「ああ。」

白川 真は天を仰ぐ。

裏路地を照らすように月が空に昇っていた。

十月。

倉石市立倉石第一高校、食堂。

わたしこと高原 京子は目の前のある人物を睨みつけていた。

そいつは昼休みになつてすぐ走つて食堂に行つても売り切れ必至の大人気の惣菜パンを当たり前のように食つていた。

そいつの名を白川 真。

くしゃりとした髪に小柄な背丈。

学年はわたしと同じ一年生。

どことなく暗い雰囲気のある一年であり

こいつはわたしが見る限りではどうやってか、わたしより先に毎回食堂に現れて惣菜パンを食つているのだ。

ちなみにわたしはこいつのせいでいつも惣菜パンを食べれずにいるのだ。

…いつか念でも送つて腹痛を起こさせたやる。

わたしがずっと睨みつけていたのに気がついたのか白川はわたしを見ると

ぼそりと小さな声で

「あの、なにか用があるんですか?」

初めて仇敵に声をかけられた。

「む、別に何にもないよ。たださ。」

「?」

「どうやつてわたしより先に惣菜パンを食べているのか不思議だ。」

「ああ、それはですね。走つてるんですよ。」

参考にならん。わたしだつて授業が終わる直前に走つてきたこともあるのに。

「む〜。」

わたしは四月に貰つたオリエンテーション用の学校の地図とこらめっこをしていた。

どう考えたつてわたしのクラスの方が近いのになぜ奴はあんなにも速いんだ?

「高原さん?」

いや、待てよ南の渡り廊下を使う手は?

「高原さん?」

いやそれでも大した差にはなるまい。

「高原さん!」

女性のハスキーな叫び声。

見れば右手に教科書を携えた今年大学を卒業したらしい新人国語教師。

あ、しまった。

「ひどい目にあつた…。」

結局、先生にたっぷりと絞られて解放されたのは午後6時。

「高原さん、大丈夫だつた?」

とわたしに話しかけてくれたのは片瀬かたせ

保奈美ほなみ

縁なし眼鏡に肩の辺りで切りそろえられた髪に少し小柄な背丈。片瀬さんの性格は地味なほうの部類に入るだろう。

イメージとしてはと大人しい図書委員といったかんじだ。

「片瀬さん、待つてくれてありがとう。」

「うん、いいよ。でも何で怒られてたの?」

それは言いにくい。まさかどうやつて惣菜パンを白川より先に奪取するかなんて考えていたなんて口が裂けても言えない。

「ごめん、すごく個人的なことだから言えない。」

「うん、そつか早く帰ろう。」

「あう、もう外真つ暗じやん。」

思わずそう言つてしまつ。

太陽はもう沈んでいるらしくあたりは暗い。

「くそ、これも全部白川のせいだ！」

「何で白川くんの名前が出てくるのかなあ。」

ぼそりと片瀬さんの一言。

しまつた、口を滑らした。

「あ、う。まあ関係ないよ。関係ない。ただこう誰か無作為に怒りをぶつけてみようと思つて。」

あれ、何か墓穴掘つてないかわたし。

「あれ、でも何で片瀬さんが白川の名前の名前知つてんの？」
たしか白川は目立つほうではないしルックスがいいわけでもない。
わたしだって彼奴きやつが惣菜パンをわたしの目の前で食わなければわたしだって気づかなかつただろう。

「あ、うん。知らないの？結構一年の間では有名だよ。」

「なんで？」

「それはね。」

「むう。」

なるほどそういうことか。

わたしは片瀬さんと別れた後に思案する。

要するに奴ことは白川は重い貧血であるらしく、先生に頼んで教室から保健室に移動していくことが多いそうな。

お陰で授業の途中でクラスから離れていく彼を責める声は多いらしく、それが一年生の間に数ヶ月の間に伝播したらしい。

保健室と食堂は同じ階にあるため走れば1分ほどで食堂につく。

それならばわたしに負ける道理はない。

と。

なんうう？

アレは。

いつも何気なく歩いている通学路の途中の何の不自然さもない裏路

地。

なのに今は。

何か甘い蜜が氣体になつて停滯しているようなそんな雰囲氣。頭に入つてくる危険信号。

きつとあそこには。

好奇心と恐怖心が交差する。

わたしが

わたしは一歩踏み出していく、明るい光を放つ電灯に近づく蛾のよう。

係わつていゝものは

ぴちゃり。数日前の水溜りがまだ乾いていないのかわたしの足元ではそんな音がする。

ない。

わたしは頭の悪い生き物が餌を捜し求めるみたいに足を進める。

出よう。

歩いているだけのはずなのに息がひどく荒い。

出よう。

ぴちゃり。また水溜り。最近買ったスニーカーが汚れてしまうなど気にはしないことにする。

今なら間に合つ。

ぴちゃり。水溜りがわたりより深くなつた気がする。

出よう。

オオオン。

どこかで犬の遠吠え。

この先には。

さつきから水溜りが鬱陶しい。

わたしが

水溜りを避けて通るために視線を落とす。

許容しきれるものはない。

あ。

体が凍る。

見れば裏路地にはわたしと変わらない年頃の女の子の死骸が転がっていた。

水溜りだと思ったのはこの女の子の体中の体液。

それが女の子の風穴の開いた左胸を中心にして広がっていた。

「ああ、ひあ。」

わたしはぺたんとその場にへたりこむ。

ぐちゅり。

女の子から何か、トマトでも握りつぶしたような音。
めぎやり。がじきぱり。

今度は小枝を連続でをへし折るような音。

結果。

ゆらりと胸に風穴を開けられた女の子が立ち上がった。

「へ？」

わたしの間抜けな声。

にこり、と骨格を変形させたような歪さで女の子が笑う。

「コンバンハ。オハナシがアルンダケド聞いてくれる力ナ？」

焼け付いた女の子の声。

「ネエ、ワタシのHサにナツテクレナイ？」
ばきやり、とアルミ缶を潰したような音。

女の子の左腕。

そこから。

血と肉がこべりついた骨が鉤爪みたいにして左腕の皮を突き破つて
出てきていた。

ぎりぎりと女の子の左腕がぜんまい仕掛けのおもちゃみたいに振り
上げられる。

「なん、ひあ。つで。」

横隔膜が痙攣したのか声がまともでない。

アニメとかなら叫び声が出るのだろうが今出でるのは涙と叫び声
とも呼べないしゃくくりみみたいな息。

「あ、い、ひつ、あ、やあ。」

わけが分からない。

どすん。

「ア・・・れ?」

その啖きは女の子のもの。
見れば。

女の子の体に何か銀色の何かが突き刺さっていた。

「エ…あガ?」

その銀の何かは時代劇でしか見られない、わたし達のようこマトモに生きている人間にとつては見ることの出来ないものの日本刀が深々と少女に突き刺さっていた。

路地に響く声。

「雑魚が。調子に乗りやがって。」

かちやりと時代劇でしか聞けない鶴鳴り。

そこには。

感染

そこには。

わたしの背後、抜き身の日本刀を持つた白川 真がいた。
服装はいつもと同じブレザー。

ぞくりとする。

同級生が刀を持っていたからじゃない。

コイツの女の子を見る目が。

まるでそこらに転がっている石でも見るような目だったから。

「オマエ、何者…？」

ゆっくりと無言で白川 まこと 真は刀を構える。

構えは中段。

「聞きたければ、俺を力ずくで聞けばいいだろ？ それがお前たちの得意分野のはずだが？」

女の子がケタケタと壊れた玩具みたいに愉快そうに笑う。

「アアああああア。お前、聞イタことがアル。ワタシタチト同ジクセにワタシタチヲ狩口ウトするヤツガ居ルッテ。」

吹き抜ける黒い疾風。

その疾風が白川だと気づくより先に勝敗は決していた。

飛び散る液体はスプリンクラーに似ている。

見れば白川が女の子の喉に刀を突き刺していた。

それで終わり。

漫画みたいに苦戦も言葉も無く、ただの一刃で全て決着がついた。

白川がゆっくりと女の子から刀を抜き取られる。

刀が支えになっていたのか、ゆっくりと力なく倒れこむ女の子。ぐしゃり。

ビール袋にためた水を破裂させたような音。

その刹那。血だまりへと倒れこむ女の子の頬は涙に濡れていた。

途端、今まで蓄積された恐怖が爆発したのかわたしは吐いた。

血だまりに広がる吐瀉物。

それでも足りないのか今度は胃液を吐き出す。

焼け付く喉。

キリキリと痛みをうつたえる胃。

「あ、はあ。えほ。」

全て吐き終えたのか今度は視界が暗くなつていく。

目を開ける。

視界に入るのは白い壁。

「あれ……？」

ゆっくりと体を起こす。

ここは……？

辺りを見回す。

・・・何というか殺風景な部屋だ。

10畳くらいの部屋に灰色の事務用の机。天井に吊つてある電灯はむきだしの蛍光灯。

学校の校長室を少し広くしたものによく似ている。

そしてわたしが寝ていたのは茶色の皮製のソファードで申し訳程度に百合の花柄がプリントされたクッションが置かれている。

「あ、目が覚めました？」

落ち着いた女性の声。

わたしはその声の主を探す。

ついさき部屋のドアから出てきたのだろう、女性がドアの前に立っていた。

声の主はとんでもなく美人だった。

年齢は20の後半といったところ。

外国人の人だろうか栗色の髪を後ろで束ねていて青色の目。彫りの深い顔立ちに高い身長。

それが同性のわたしだって見とれるほど完璧なバランスで配置されていた。

そのくせどこか雰囲気は子供みたいだ。

「あの？大丈夫ですか？」

「あ、えとなんでわたし。」

しどろもどろになりながら話す。

「ええっと、とりあえずお怪我はなさそうですね。」

「あ、はい。」

女性はにっこりと微笑むと

「自己紹介が遅れました。私の名前は九条 麻衣といいます。」

女性 九条さんは微笑んだまま手を差し伸べてくる。

握手なのだろうか。

それよりもこんな時はやっぱり挨拶をしておくべきだらうか。

「えっと、わたしの名前は、」

すると九条さんはやつぱり微笑むと

「高原 京子さんでしたね。真さんと同じ学校に通つてゐるそうです

ね。」

まこと・・・?そんな名前の人いたっけ?

「あの真つて誰のことなんですか?」

「俺のことだ。」

「わつ。」

いつの間にそこにいたのか事務用机の隣に一人の少年が立つていた。

くしゃりとした髪、小柄な背丈。

間違いなく白川 真だった。

「お前の命の恩人を見ていいなり驚くとは失礼な奴だな。」

「え・・・?こいつが命の恩人?」

「あ。

思い出した。

あの裏路地でわたしは。

あの女の子に。

カタカタと記憶のフィルムが回る。

確力ニ、アノ女ノ子ハ泣イテイタツテコウノニ、コイツハソレヲ簡
単ニ。

わたしは体を起こすと白川に掴みかかる。

「…つあんた。この人殺し！」

すると白川は体を捻つてかわす。

そうして背後をとつた白川はわたしの腕を掴んで背中に回し、腕を首の方向に持つていく。

刑事ドラマでよくある犯人逮捕する時の固め技だ。

この技は投げ技とは違つて派手さはないけど人を押さえ込むには十分だ。

「つあ。いたい、放して。」

さすがに拙いと思ったのか九条さんが

「真さん！止めてください！」

不満そうに白川は手を放す。

「お前、別に恩を売るわけじゃないが仮にも俺はお前の命の恩人のだろ？」

感謝されこそすれ殴りかかられるような仕打ちはした覚えはないんだが。

白川の言葉は正論だ。

もしもあの時白川が来なかつたら、わたしは

でもそれでもどうしてかあの時、たしかに女の子は泣いていたことが忘れられずにいた。

「…それでも、わたしは。あの時あの女の子が殺されたことは覚えてるから。」

すると白川はわたしを睨みすえて嫌悪感を露にした表情で

「お前、アレが人間だつてまだ本気で思つてるわけか？」

「え？」

白川は今、何と言った？

「聞こえなかつたか？あいつはもう人間じやない。」

耳を疑う。

コイツはナニを言つてるんだ？

「あの連中はな、『鬼』と呼ばれている。正真正銘のバケモノだよ。」

「

「え？ お・・に？」

聞きなれない単語に耳を疑う。

そんなのいるわけないつていうのに。

認めればきっと、得体の知れない何かにわたしは怯えなくつちゃいけない。

だから認めるわけにはいかない。

だつて、いつのにわたしはどうしてか否定しようとするたびにあの女の子の涙に濡れた顔を思い出す。

「まあ、別にお前が信じなくつても俺は構わない。全部を否定して逃げればいい。」

白川の言葉が胸に刺さる。

その言葉は挑発でもなんでもなく、ただ【これより先に深入りすればお前はもとの生活には戻れない】と言つている。

だけど。

あの女の子は確かに泣いていたんだ。

だからそれを否定して逃げるわけにはいかない。

「分かつた。わたしに全部話して。」

すると白川は猛禽もうきんめいた目でわたしを睨む。

「お前、本当に覚悟はあるんだよな？」

口々口が凍りつきそうになる。

でも。

「お願い、わたしは知りたい。だから教えて。」

「『鬼』は人を喰う。これは例外のない特徴だ。そして奴らのもう一つ特徴は人間では有り得ない力を持ちえる。

この一つはアンタもおどき話で聞いたことぐらいはあるだろ?」

「……。」

無言のわたしを無視して白川は話を進める。

「それと伝承にはないが『鬼』にはもう一つの特徴がある。それは、人に鬼の能力が感染する能力。そいつは『鬼』の死に際に発生する。

「

次の白川の言葉に絶句する。

「だからアンタも感染してるからや。アンタ死んでくれ。」

「へ？」

キン、と鯉口を切つて銀の軌跡が走る。

「あ、え？」

揺らぐことのない切つ先がわたしの喉元に突きつけられる。

「い・・・やあ。」

白川はため息をつく。

わたしの服に少し刺し込まれる日本刀。

「四週間。」

白川がぼそりと呟いた。

「へ？」

「四週間後、アンタも立派なバケモノになる。

知らないほうがマトモな世界の見方で死ねたっていうのに。」

ドクン、ドクン、ドクン。

鼓動がうるさい。

胸を締め付けられるような圧迫感。

それに誰かに見られているような気が。

誰にー？

「あれ？」

気づけばわたしは白川に抱きつかれるように倒されていた。
俗に言ひタックルだ。

直後。

何かの出来のいい楽器のようご、
パリン、パリン、パリン。
この部屋のガラスが立て続けに割れる音をわたしは聞いた。

「 今。」

油断なく立ち上ると白川は日本刀を構える。
九条さんも立ち上がる。

その声はさつきまでの九条さんとはうつて変わってどこか冷徹な表情。

わたしも体を起こす。

そこには。

わたし達の部屋の反対側。

一人の初老の男が立っていた。

長身瘦躯に背広姿。

深い皺が刻まれた顔は笑えば人を安心させてくれるような温
和な顔。

そして鼻にかけた丸眼鏡。

男の人相を一言で表すのならば優しい執事さん、というのが似合う
だろう。

それが右手にマシンガンさえ持つていなければの話だが。

男はにこり、と微笑むと

「どうも、こんばんは。夜分遅くに失礼したことをお許しください。

」

ぺこり、とじく自然に会釈をする。

白川は日本刀を構えながら男を睨みすえる。

男もマシンガンを構える。

それはこれ以上近づけばマシンガンが発射される、という意思表示
だ。

「アンタ、どうやって入ってきた。」

男はふう、と息を吐くと。

「別にいいでしょ、用件だけ言いますよ、そこのお嬢さんを渡し

なさい。」

白川の姿が消える。

ひゅおん。という風を切る音。

爆ぜる火花。

「ぐお。」

ざつくりと大根でも切るような自然さで。

白川は男の右腕を肩から切断していた。

どさり、重い砂袋を落としたような音。

見れば右腕を切られた男が尻餅をついて倒れていた。

マトモな人間ならば右腕が切断した時点で致命傷のはずが男の顔からは微笑みは消えない。

いや、それよりも異常なのは男の肩からは一滴も血が出でないと
いうことか。

「ふふ。さすがはあの方の一部。兵器程度では脅しにもなりません
か。」

白川は男を睨みすえたまま刀を逆手に持つ。

慈悲すら持ち得ない機械のような目で男を見る。

白川はやはり感情のない声で

「アンタ、そこの女をどうするつもりだ。」

男に問う。

男は一瞬だけ自分の切断された右腕を見て、それから白川を見ると
にやり、と口角を吊り上げる。

「『女王の使い』といえば分かるでしょう？ あの方が近々この町に
やってくる、と言えばお分かりになりますね。」

白川の表情が機械から憎しみのこもったものに変わる。

「あんた、アレの事を知ってるのか。」

男はますます口角を吊り上げ、昔話でもするような口調で

「ええ、よく知っていますよ。いつもの方は寂しそうにしていらっしゃる、貴方のことですね。だからこゝは一つの方の笑顔が見た
いと思いまして。」

げらげらと男の服装には似合わない下品な笑い声。白川は感情を押し殺した声で小さく何か呟いた。

男は一旦笑うのをやめて

「え？ 何ですか？ 命乞いをさせてくれるんですか？」

白川は今度は低く無理やり感情を押し殺した声で。

「黙れ。」

風を切る音。

「ひが。」

男の潰れた声。

男の口に刀が突き刺さっていた。

男の顔が青ざめていく。

「お、が、え。」

白川の表情は変わらずに憎しみのこもった顔。

「黙れと言った。」

ゆっくりと刀を横にスライドさせていく白川。ズバ、と肉の裂ける音。

右頬がかろうじで残っている男がそのままの姿勢で座り込んでいた。

白川がくるり、と踵を返す。

そこにはさつきと変わらない感情もなく立つ白川がいた。そしてわたしは。

「驚きました。まさか、貴方があそこまで動搖するとはねえ。」

低い男の声が部屋に響くのを聞いていた。

いつの間にか男が、わたしの目の前に立つていて。何一つとして傷のない乱入したときと全く同じ姿です、と男はわたしの目の前で会釈する。

「ああ、お姫様。こちらに。」

にこり。と悪意のない笑顔でわたしの顔を見る。

白川は刀を構えなおす。

その動作を見た男はくるり、とわたしの背後に回る。

「いいのですか？あの方を倒す唯一のチャンスを失うことになるのですよ？」

白川は刀を構えるのを止める。

「そうです。貴方はそうして指をくわえて見ておきなさい。」
「げらげら、と下品な笑い声。

その合間。

空気ではなく頭蓋を振動させるような声。

「爆ぜる。」

瞬間、風船を割ったような音。

何かわたしの後頭部に何か紙みたいなのが張り付いて

「へ？」

見ればそれは赤黒く染まつた何か。

べしゃり。と何かが倒れる音。

「ふう、うちの事務所にも蠅が一匹忍び込むとはね。」
予期せぬ乱入者。

わたしは声のする方向 後ろに振り返る。

男が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9350d/>

人鬼

2011年1月11日17時02分発行